

議長 本案は定款第53条により出席会員1,429名の2/3 (953名)以上の賛成があったので可決成立しましたと報告

議長 昭和50年度事業計画, 昭和50年度予算案を一括して採決すると宣言し賛成者の挙手を求めたところ全員

挙手があったので両案とも承認された旨報告した。

その他 51年度の当番支部について：中部支部とすることに決定

議長 これで全議事終らせていただきます。御協力ありがとうございました。

南極委員会からのお知らせ*

1. 南極地域における気象研究観測再開

第15, 16の二次にわたって空白だった気象部門の研究観測は第17次(1975年出発)から再開され, 課題としては, 日本気象学会推薦の“南極におけるエロゾルおよび微量気体成分の研究”(主任研究者: 斉藤博英氏〔気象研究所物理気象研究部〕)が採択された。その計画の概要は次の通りである。

- (1) エロゾルの数濃度, 粒径分布, 氷晶核, 雲核, 海塩核等の数濃度の測定および粒子の物質固定;
- (2) エロゾル等の性質の推定を目的とした日射分光測定, 放射収支に対するエロゾルの効果;
- (3) 微量気体成分の測定。

第17次(初年度)はすでに隊員も決定し, 放射測定を主体とした越年観測が予定されている。第二年度は直接採集を主体とする測定が予定されており, その具体的内容が固まりつつある。第三年度の計画については今後の

* 南極委員会:〔担当理事〕北川信一郎(委員長), 丸山健人:〔委員〕川口貞男, 清水正義, 関口理郎, 村井潔三, 吉田菊治(事務局)

討論によって決まる部分がかかなりのこされているように思われる。第二年度以後の隊員は未定なので, 希望者があれば主任研究者まで連絡してほしいとのことである。

以上が再開される南極地域研究観測の現状であるが, 数年後に予定されている POLEX 観測等を考慮に入れた長期計画の早期確立が望まれている。

2. 南極地域における定常気象観測の現状

南極地域観測は初め学術研究的な性格が強かったが, 昭和40年以降研究観測部門と定常観測部門に分けられ, 恒久的に観測を継続する方針が打出された。このため, 気象の分野では研究観測隊員(1名)とは別に毎年気象庁から定常観測隊員(4名)が派遣されており, 現地では互に協力しあって観測および研究調査を進めている。昭和基地における主な定常観測業務は, 地上1日8回観測4回通報, 高層1日2回のルーチン業務のほか, オゾン観測, 高層天気図の無線模写放送の受画や気象衛星写真の受画などである。関心のある方は気象庁南極観測事務室に照会されたい, とのことである。

(以下38ページの続き)

なう必要があります。この他に, 気温の高度分布の相似の問題もありますが, 紙数の関係で, これは省略します。

最後につけ加えておきたいことは, 風洞実験は現地観測による研究手法に較べて, 労力, 経費あるいは調査年月等の点で, はるかに有利な手法です。そのために, 新しく, しかも大型風洞が, わが国だけでなく世界各国でも盛んに造られつつあります。しかしながら, 風洞実験だけで, 地形, 建造物周辺の気流の問題を研究しようとするには無理があります。やはり, できるだけ, 現地観測を行なうようにし, 両方のデータを照合し合っ

て, 正しい結果を求めてゆく姿勢が必要です。なお, 風洞実験にさいして, 自然風の性質, 大気の流れ構造等を予めよく調べてかからないと, 実験の手法を誤ることがあるし, また, 得られた結果の自然風への適用を正確に判断できないことがあります。風洞実験は一見簡単に見えますが, 以上のごとき基礎知識も必要ですし, また費用もかなりかかるものです。蛇足ですが, 風洞一基の製作には数億円かかりますし, 供試地形模型にしても, 一台100万円位の費用がかかるものです。

(気象研究所 相馬清二)